



彫刻の普及発展

み 三 うら 浦 きん の しん 金 之 進

(89歳)

住所
男鹿市

昭和14年、秋田師範学校手工芸担当教諭として採用され、以来一貫して彫刻の指導にあたり、多くの彫刻家の育成に努力した。

この間、昭和26年発表の「金属工芸の理論と実際」を初め、「都市美と彫刻」など優れた論文を発表したほか、秋田県の美術教育振興のため、学校現場の教師を中心とした「秋田県彫塑教育研究会」の設立に努め、昭和36年1月には、この研究会は彫刻家を初め美術愛好家を包含した「秋田県彫刻連盟」を設立させ、会長として、連盟展や日本各地から参加者を募って開催される彫刻シンポジウムなどユニークな活動を開始し、秋田彫刻界のレベル向上に大きく貢献した。

また、日展を初め日彫展太平洋画会、県展等で入選を重ね、これらの作品を県や市に寄贈したほか、後輩の育成にも尽力している。



児童文学の向上

故 なめ滑 かわ川 みち道 お夫

(86歳)

住所

東京都

大正15年から平成3年までの62年間にわたって教職にあって、湯沢女子小学校、秋田明德小学校、成蹊学園教育研究所長、東京成徳短大教授等を歴任した。

明德小学校訓導時代の昭和5年には、成田忠久らと共に教育誌「北方教育」を創刊し、その後一貫して作文教育、読書指導に取り組み、その活動は教育界全般に広まった。この綴り方教育の実践を初めとし、国語教育、我が国児童文学研究の第一人者として、東京教育大学等で教鞭をとる傍ら、文部省教科書等調査委員、文化庁芸術選奨文部大臣賞文学部門選考委員等の委員として、児童文学や国語教育の研究開拓のみならず、教育行政においても重要な役割を果たし、秋田県はもとより、日本の児童文学の向上に多大な貢献をした。



俳句の普及発展

おぎ 原 えい じ ろう
荻 原 栄 二 郎

(82歳)

住所

秋田市

大正14年から句作を始め、俳句において秋田の風土を作品化し、郷土季語の掘り起こしに尽力した。

昭和6年からは、斎藤蓀葉主宰の「玫瑰（はまなす）」で活躍し、昭和11年には俳誌「石路（つわ）」を創刊、以来今日に至るまで50余年にわたり発刊を続けるとともに、俳誌「東北俳壇」の雑詠壇選者を務めたほか、「季語鑑賞・秋田歳時記」「あきた季語春秋」等を出版刊行している。

また、昭和57年に五城石露俳句会の発足に尽力したほか、昭和59年にはNHK「言葉の歳時記」「秋田・季語の世界」に出演するなど、県内外の俳句教室、句会の講師を務め、愛好者の拡大を図るとともに、未経験者のための「十七音塾」を開講、底辺の拡大と指導、育成に尽力し、本県の俳壇の隆盛に多大な貢献をしている。



書道の普及発展

み　　うら　　れい　　じ
三　　浦　　禮　　治

(78歳)

住所

秋田市

昭和30年代から現在まで、県内地域の住民教養講座、書道講習会、研究大会等の講師、指導者として書道の普及発展に貢献するとともに、秋田県教育書道研究会の発足に参画、指導者の研修、児童生徒の技術の向上と芸術的情操の涵養に尽力している。またこの研究会会長として、全県研究組織の一本化を実現し、会の発展の基盤を整えるとともに、本県で32回を数える全県小・中・高校生参加の席書大会開催の基礎づくりと発展に貢献した。

また、昭和36年の秋田県書道連盟結成に参画、56年には理事長に選出され、組織の確立と各事業の振興に尽力した。

このほか、「三浦朝風作品集」「三浦朝風書」「三浦朝風書跡」を刊行し、高い評価を得ている。



スポーツの普及・振興

お 小 ざわ ゆう ぞう
小 澤 雄 象

(74歳)

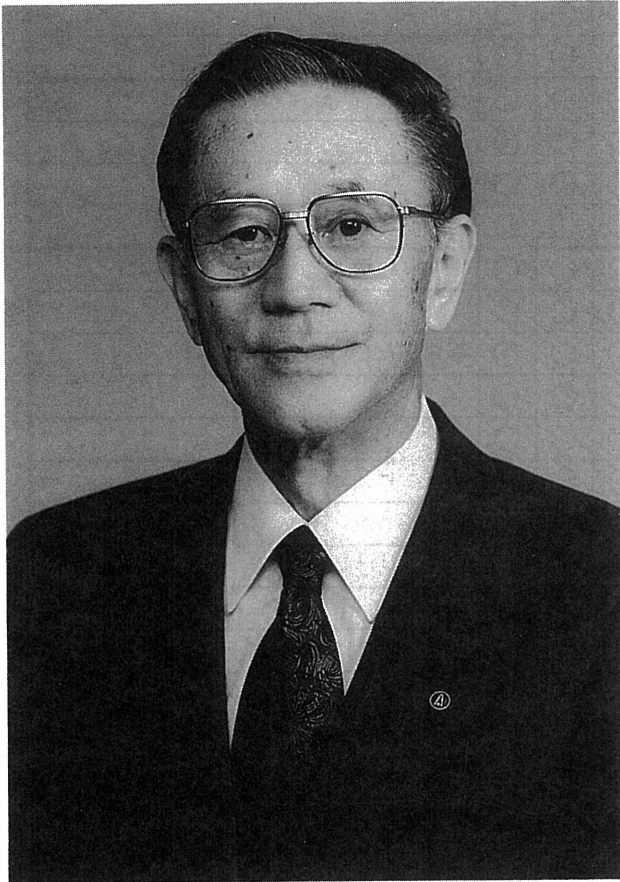
住所

秋田市

昭和50年から秋田県体育協会理事、常任理事、副会長を歴任し、関係団体の調整、組織の整備、強化を図るとともに、選手の適切な強化と、優秀な指導者の養成、確保に尽力し、本県スポーツの振興に多大な貢献を果たしている。

また、秋田県アマチュアボクシング連盟の創立に参画して組織基盤の整備に尽力し、現在、副会長として活躍しているほか、選手の育成、強化に努め、その振興に大きな功績を残している。

さらに、秋田県ラグビーフットボール協会の副会長、昭和59年からは会長として、ラグビー愛好者の増大や生涯スポーツとして定着させるなど、スポーツの普及、発展に多大な貢献をしている。



産業・経済の発展

さ とう こう ご
佐 藤 興 吾

(69歳)

住所
秋田市

昭和55年アキタ電子(株)取締役社長に就任、同社を県内初のIC生産専門工場に転換し、LSI、超LSIの量産化に成功するとともに、秋田県の集積回路生産を飛躍的に増大させたほか、地域雇用の拡大に貢献した。

また、労働環境、福祉向上にも積極的に取り組み、心身障害者の雇用促進や労働衛生水準の改善など、他の模範となる労働環境の改善に尽力している。

昭和61年には秋田県電子工業振興協議会を設立し、会長として会員相互の技術交流、新技術の導入指導など、業界のレベル向上に大きな役割を果たした。

このほか、秋田テクノポリス地域指定に向けて多大な貢献をしたほか、産学官連携による地域技術高度化のため、「秋田大学地域共同研究センター」「秋田科学技術協議会」の設立に尽力し、産学官連携体制を確立した功績は多大なものがある。



農業の振興発展

こにしとしたか
小西俊孝

(67歳)

住所

河辺郡河辺町

昭和31年当時、新技術として水稲作農家に導入されつつあった稲三早栽培、及び昭和33年からの稲作加熱育苗集団栽培等の稲作技術の向上、普及に大きく貢献し、稲作の飛躍的な増収に寄与した。

昭和34年にビニールハウス利用による施設園芸の導入を図り、優れた洞察力で常に将来有利と思われる作目を選択し、キュウリ、マスクメロン、葉菜類、鉢花、菊等の切花、洋蘭の切花など新しい作目を導入、その後、ガラス温室をも設置し、花き栽培の専業農家としては県内一の規模を誇るなど、農業経営の改善と農業技術の改良普及に大きく貢献している。

昭和38年からは、秋田温室メロン連絡協議会、県花き生産者連絡協議会の初代会長を歴任し、本県施設園芸振興の基礎づくりを果たすとともに、野菜花き園芸農業の振興と育成、強化に尽力している。